

東アジア都城史序論

—有牆壁社会と無牆壁社会の比較と相互交渉の検討を基礎に—

佐竹 靖彦

序論 有牆壁社会と無牆壁社会

本稿を序論と名付けるのは、その検討の対象が巨大な広がりをもっており、容易に全面的な検討を許さないと同時に、これまでこの問題について参照できるべき研究がほとんどないため、一定の全面的な視角の提出が必須となるからである。このような本稿は、考古学の発掘にやや似たところがある。たとえて言えば、遺跡の性格についての一定の認識あるいは仮説が必要とされると同時に、実際に行なう作業は遺跡の適当な場所にトレンチを入れて、その発掘の結果を考察するという局限された形となる。

本稿で考察の主題とするのは、集落あるいは軍事的意味合いをもった家屋の周囲の防壁の機能とその有無の問題である。

衆知のようにこうした防壁を表現する言葉として従来使用されてきたのは、城郭という言葉である。しかし、この城郭という言葉には二つの意味がある。ひとつは、集落とりわけ都市集落の防壁としての城郭であり、いまひとつは領主の居館の防壁としての城郭である。両者は実体としても機能としても、まったく異なった存在である。

そもそも城という言葉とその実体は、中国に始まったものであり、その中国では城とは防壁としての城郭をもつ集落であり、領主の居館を城と言ったり、その防壁を城郭ということとはまったくない。これに対して、日本の場合には王都さ

え本格的な羅城をもたないのが常識であり、集落を城と呼ぶことはまったくない。

そこで、事態の混乱を避けるために、本稿では日本の城、中国の城の両者を通じてその防壁のことを牆壁あるいは郭と呼び、日本の領主の居館の場合はそれを日本語そのままに館と呼び、中国の都市の場合はそれを中国語そのままに城と呼ぶことにする。すなわち、日本のいわゆる城郭は、館郭あるいはより分析的な用語法では館の牆壁、中国のいわゆる城郭はそのまま城郭、より分析的な用語法では城あるいは集落の牆壁と呼ぶのである。

第二の問題は本稿での検討対象の限定である。以上のいわゆる城郭についての概念の整理からも、ひとつの重要な問題が浮かび上がってくる。それは、中国においては軍事的な防壁は集落をめぐって構築され、日本におけるそれは領主の住居をめぐって構築されるという両社会の構造的な差異の問題である。

本稿は、こうした差異を基礎にもちながら出現する東アジアの日本と中国の王都の問題の理解に巨視的な観点から一定の筋道をさぐろうとする試みである。このような巨視的なことを単なる砂上の楼閣に終わらせないためには、相当地な限定と禁欲が必要になる。本稿での作業は、中国と日本の文明的類型の差異の確認、牆壁の問題に意識を集中した形での中国型文明と日本型文明の原型の確認、中国型の集落牆壁の問題の特徴の王都における確認と集落一般における確認、中国型文明の吸収のなかで展開した日本史における王都と館郭の特質の問題という諸点に限定する。そして、こうして限定した論点のいずれにおいても、論点を特徴的な問題ならびになんらかの形で論証可能な問題に絞って提出することによって、きわめて限られた形であれ一定の客観性を確保するように努めたい。

これまでの中国史研究において、都市城郭の問題は重要なテーマとして一貫して議論されてきたが、その主な論者は宮崎市定氏であった。中国古代史の特徴を城郭都市の存在にもとめ、ギリシャ・ローマの都市国家と対比すべきものとするのは、その「中国城郭の起源異説」(『歴史と地理』三三—三、一九三三)以来の、同氏の基本的な立場となった。同氏の場合には、城郭を持たない集村、散村の存在は否定されていないが、次第に城郭都市の存在にすべての問題が集約されるような議論に傾いていったように見える。このような傾向は王先謙の後漢書集解における城郭問題の把握に対する

宮崎氏の誤解にも表現されている。^{〔一〕}これは本来城郭をもつた都に対する城郭をもたない鄙の問題として処理すべき問題であり、都市国家に対する理解は経学の伝統的理解と接点をもつべきであったように見える。

これに対して、池田雄一氏はその「漢代における里と自然村について」(『東方学』三八、一九六九)以来、中国古代の自然村の存在とその意義を強調する立場の論文を多く発表されている。当然のことながら池田氏の場合にも城郭都市の存在は否定されていないが、それは県城以上の「政治都市」に限られていたと理解されているようである。

ここでは紙幅の関係で討論は省くが、中国古代にあつて城郭をもつ都市と城郭を持たない小集落の併存が見られたという点はほぼ確実であろう。問題は城郭都市が鄙に対する都として優越した地位と機能を持っていたことである。

筆者自身は、最近の『中国古代の邑制と田制』(岩波書店、印刷中)において、中国古代の城郭都市の分布が、洛陽から齊魯にいたる中原にその分布の中心をもつことを論じた。これは、本来は牧畜民族であつた周、秦の中原進出の過程と関連する事態であつたと想像されるのである。こうして、筆者をも含めて従来の議論は中国における城壁の問題に意識を集中させてきたが、最近、都市城壁、万里の長城、四合院の院牆を含めて議論する壮大な構想が熟しつつある。本稿では、この見解の代表的な論者である妹尾達彦氏の見解の紹介から議論をはじめたい。ただ、妹尾氏の議論では、中国社
会における空間序列等の現象が直接に城壁の問題に関連づけられているが、同様の有城壁社会である中近東やスペイン等では、このような空間序列等の現象は見られないように考えられるので、この問題は今後別途に検討する必要がある。

一、人類の初期文明における「集落に城壁をもつ社会」の存在

本稿は直截に言えば、人類の文明を集落に城壁をもつ社会と集落に城壁をもたない社会に分けて、集落に城壁をもつ社会としての中国文明および城壁を持たない社会としての日本文明における、権力中枢と王都ならびに一般的集落に見られるその関係を巨視的な観点から具象的に明らかにしようとするものである。

筆者が、このような牆壁のあり方に関連する文明の二つの類型という考え方を持つようになったのは、いまからほぼ二十年近く前に、中国の地割りの問題に興味を持ち出して以降のことである（『商鞅田制考証』『史学雑誌九六—三』一九八八等）。実際にはこうした観点に立つ研究は、すでに決して少なくはなかったはずであると思われるのであるが、このころ筆者の管見に入つたものとしては、わずかに安田喜憲氏と竹内実氏の発言に限られている。

まず安田喜憲氏は、その『大地母神の時代 ヨーロッパからの発想』（角川選書、一九九二）において、トルコのボガズキョイ遺跡が巨大な城壁をもつことに注目して、次のように述べられている（同書五六頁）。

都市を城壁で囲む伝統は、メソポタミア、シリア、トルコなどの中近東地域で発生し、その伝統がギリシャ、ローマ、ヨーロッパへと受け継がれたのである。これに対してエジプトの都市は立派な城壁をもたない。日本の平城京の築地も、城壁というほどのものではない。人類史には、城壁をもつて堅固に居住空間を囲む都市文明の伝統と、堅固な城壁をもたない都市文明の伝統があるようである。

竹内実氏は、その『世界の都市の物語 北京』（文芸春秋、一九九二）において、中国文明の中核的要素としての、城郭、さらには万里の長城について印象的な描写を与えられている。さらに、四合院の建物の窓のない外壁と外壁に囲まれた路地としての胡同について触れて、それが都市の城壁の中にさらに築かれた小城壁に囲まれた通路であることを説明される。この四合院の構造は次のように描写されている（同書三二〇頁—三二二頁）。

中庭。パティオをたのしむ家屋の構造は、スペインから北京まで、ユーラシア大陸を帯のように横断してつづいている。北京では外壁に窓をあげない。厚い門扉を閉じれば、完全に外部から遮断される。二階建がないから、中庭の上空はささぎるものがない。小宇宙である。中庭を囲んで建物がある。東、西、南、北にそれぞれ一棟。中軸線を中心に、左右が対称的に均等であるのは、皇帝の住まいである紫禁城と同じである……（一家の主人は）小宇宙の帝王である。

「都市を城壁で囲む伝統」と「家屋の（中庭）構造」が一对のものであることは、直観的に了承できる事柄である。この

一対の壁構造をもった社会が、「ユーラシア大陸を帯のように横断してつづいている」のである。

このような文明の構造とその分布について、最近、妹尾達彦氏がきわめて包括的な見取り図を示している。すなわち妹尾氏は、最近五千年ほどの文明史を、(Ⅰ)北緯三〇度前後の大河川流域の農耕地帯(エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、長江文明)、(Ⅱ)北緯四〇—五〇度あたり遊牧地帯、ならびに(Ⅲ)両者のあいだに带状に存在する農業遊牧境界地帯という三つの地帯に分けて構造的に捉えられている。

妹尾氏はまず、(Ⅰ)(Ⅱ)との相互関係から、(Ⅲ)あるいは(Ⅲ)に隣接する農耕地帯に都市と政治権力が発生したと考え、この都市と政治権力をもつ文明は堅固な城郭をその特徴とすると考えられた。まず、「都市と政治権力」の発生について、

農業—遊牧境界線上やそれに隣接する農業地帯は、農業と遊牧という異なる生業が接触する地帯であるために、それぞれの地帯の異なる産物が交易され、多様な人々が交流して情報と富の集積する場となる。その交流を保証・調停し、蓄積する情報と富を管理、防衛する必要が生じ、農業—遊牧境界線に隣接する農耕地帯に、多くの都市と政治権力が発生するにいたったと考えられる(同上書、三一頁)。

つづいて、これらの都市が城郭都市であり、これらの社会が妹尾氏のいう「壁文化の社会」となった理由について、次のように述べられる。

農業—遊牧境界線と接する農耕地帯では、遊牧民の侵入を防ぐための長大な防御用の長城がぎざぎざに描かれている。中国華北の万里の長城、ササン朝ペルシャがエフタルの侵入を防御するための長城、ローマ帝国がバルティアの侵入をふせぐための長城の建築である。これらの長城は、ユーラシア大陸の各地において、遊牧世界と農耕世界の対立と交渉が、本格的にはじまったことをしめすモニユメントであった。また、この地帯の都市は、例外なく高く堅固な城郭によってかこまれている。農村が土壁にかこまれていることも多い。城壁内の居住地区も、院子とよばれる中庭をもつ北京の四合院住宅から、イベリア半島の中庭形式の住居にいたるまで、一貫して、外に通じ

る門を限定して中庭から光をとる、防御的な建築構造になっている(同上書、三二頁)。

以上の妹尾氏の見解をごく簡単にまとめると次のようになる。

まず、第一にユーラシア大陸の歴史の展開の基底にあったのは、北の遊牧社会あるいは遊牧地域、南の農耕社会あるいは農耕地域、その中間の「農業・遊牧境界地帯」の併存とその相互交渉である。まず、北の遊牧社会あるいは遊牧地域と南の農耕社会あるいは農耕地域とは生産する物資が異なるから、ここに南北のあいだに交易関係が成立する。つぎに、その中間の「農業・遊牧境界地帯」では生態系が共通するために東西の交易が簡単に成立する。

こうして成立した農業・遊牧境界地帯上、あるいはその南辺のこの農業・遊牧境界地帯と接壤する地域の都市群は掠奪と戦闘の舞台となるために、例外無く城郭都市となる。さらに、居住形態から見ても同じ理由の為に、家屋が中庭形式をとる。中国は壁文化の社会であり、いちばん大きな壁は万里長城、つぎに大きな壁が都市の城壁、最後が家屋の壁、すなわち家屋も又外敵の防御の為に外側には窓を作らず、中庭形式で光をとるということになる。

妹尾氏のこれらの見解は、はなはだ簡単明瞭であり、同時にきわめて説得力がある。われわれは、安田喜憲、竹内実、妹尾達彦三氏の見解を総合することによって、初期人類文明の中心地帯に牆壁をもつ社会が存在したこと、伝統中国社会はこの牆壁をもつ社会の類型に属することを理解できるのである。

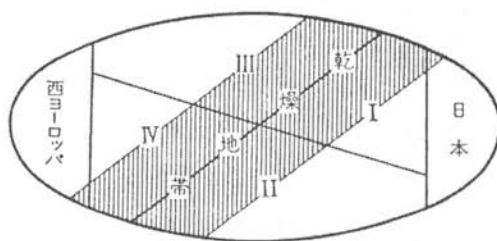
二、有牆壁社会中国と無牆壁社会日本

さて、中国とりわけ華北は「有牆壁社会」に属することになる。この中国社会を全面的に理解するためには、最低限二つの方面からの検討が必要である。その第一は、この「有牆壁社会」そのものと壁の構造を持たない社会との比較検討である。ついで、この広義の「有牆壁社会」のなかで、中国とりわけ華北がどのような位置にあるのかという方向からの検討という問題である。

この第一の問題については、「有牆壁社会」論の出現以前にすでに提出され議論されてきた生態史観の見解をとりあえず出発点として採用することができるであろう。

すでに早く一九五七年にこの生態史観を世に問われた梅棹忠夫氏は、ユーラシア大陸を横長の楕円形に単純化して、その中心部分に東北から南西に走る乾燥地帯の存在を認められた。この乾燥地帯の東南側には、これまたその東北から南西に向けて中国世界とインド世界が存在し、乾燥地帯の西北側には、その西北から西南にかけてロシア世界と地中海・イスラム世界が存在するといふのである。梅棹氏は、この中国世界、インド世界、ロシア世界、地中海・イスラム世界の四つの文明圏を併せて人類文明の第二地域と称する。そして、中国世界のさらに外側には日本が、地中海・イスラム世界のさらに外側にはイギリスが存在するとして、この日本とイギリスあるいは西欧を併せて、人類文明の第一地域と称する。そして、この日本とイギリスあるいは西欧の属する人類文明の第一地域から近代文明が生まれたといふ(図一)³⁾。

梅棹忠夫氏のこの見解は、近代社会の誕生とその誕生の論理を世界史的に位置付けようとするものである。梅棹氏は人類文明の第二地域においては、乾燥地帯の遊牧民の侵略によって自生的な遷移の過程が妨げられるのに対して、人類文明の第一地域においては、自生的な遷移が可能となり、この地域ではじめて自生的な遷移の結果としての近代社会が生まれたといふのである。ここで生態学から援用して用いられた遷移の論理は、外部からの攪乱を免れた自然な遷移の過程が実現するか否かに、社会の停滞と発展の分岐点を置くものである。しかし、実際の人類の歴史においては、外部からの影響あるいは攪乱を、それを受けた地域がどのように吸収するのかが問題になる。たとえばイギリスや日本の発展過程において、外部社会との関係がその地域の発展にとって



図一 梅棹忠夫氏による「ユーラシア大陸の文明地図」
(梅棹 1957: 安田前掲書より引用)

きわめて重要な意義をもつと想定される。イギリスや日本に外部からの攪乱や影響のない自生的な遷移を想定することには問題があると考えられる。

一、有牆壁社会中国の原型と無牆壁社会日本の原型

(一)、「有牆壁社会」中国の「無牆壁社会」日本への影響

さて、「無牆壁社会」としての日本の歴史を観察するときに、ひとつの重要な留意点がある。それは、日本の歴史が「有牆壁社会」としての中国の歴史の強い影響の下に展開してきたという問題である。日本の歴史は、単純に「無牆壁社会」として展開してきたのではなく、中国の歴史の影響の下に、一種の「壁構造」の論理を受け入れながら展開してきたのである。

ただし、このような複合的な様相を示した日本史の展開を全面的に認識するのは、本稿の手に余る問題であるので、最初に「有牆壁社会」としての中国の歴史と「無牆壁社会」としての日本の歴史との類型的な比較を行い、そのちに日本における「壁を持たない社会」としてのその歴史の展開の様相を簡単に観察するに止めたい。

類型的比較の対象とするのは、中国の詩経に見られる社会構造と日本の古事記に見られる社会構造である。以下、詩経については白川静氏の翻訳によって、古事記については武田祐吉・倉野憲司両氏の校注と武田祐吉氏の翻訳を参考として示すことにする。

(2)「有牆壁社会」としての古代中国

まず、中国古代の都市城郭については、詩経鄘風「擊鼓」に、

鼓を撃つことそれ鎧たり、踊躍して兵を用ふ、国に土し漕に城き、我れ独り南行す。

とある。これは、白川氏によつて、衛国が河内の衛都を戎に奪われ、国都を漕に築いたときのことであるとされている。都市は城郭によつて守られることによつて存立し、城郭内をひとつの社会的な場、力の結集の場として存在するのである。

このような城郭都市には城門がある。鄭風「子衿」には、

挑たり達たり、城闕に在り、一日見されば、三月の如し。

とあつて、若い男を思う女の歌であるとされている。城門は諸物の交会するところであり、男女の出会ひの場でもある。同様に、陳風には、雨乞ひの場であるとともに歌垣の場であつた陳国の東門がしばしば歌われている。

城郭都市の内部は、里の壁によつて仕切られ、さらに里内は現在の四合院の前身としての各家の牆によつて区切られている。同じく鄭風「将仲子兮」には、

将くは仲子、我が里を踰ゆるなかれ。

将くは仲子、我が牆を踰ゆるなかれ。

とある。全体で三章のこの詩の第一章のはじめは、若い女性がその恋人が里壁を越えて忍んでくることを止める言葉、第二章のはじめは、家の牆壁を越えて忍んでくることを止める言葉とされている。⁽⁶⁾

一方、このような「壁構造の社会」は、孤立して存在しているわけではない。詩經小雅谷風「大東」に、

周道は砥の如く、其の直きこと矢の如し、君子の履む所、小人の視る所。

とある。周道は「周の東西の幹線道路。これが周の東方經營の動脈であつた」(白川静同上書)。ローマの道のように直線的でよく整備された幹線道路を通じて、周は各城郭都市を支配していた。そして各城郭都市の首長たちは、周の「封建」制度のなかに位置付けられていたのである。⁽⁷⁾

ごく単純化して言えば、詩經に見られる中国社会は、すでに壁を持つ家、壁を持つ都市を単位として、周道等の物理的統制手段をもつ王朝をその上に頂いた複合的な社会であつた。

長安から北京へ——城郭都市の観点から見た中華二〇〇〇年の首都(佐竹)

(3)「壁構造を持たない社会」古代日本

これに対して、古事記に見える古代日本社会は、そのような意味での壁を持っていない。日本社会において、中国における壁に相当する役割を果たすのは、家、それも十全なる意味では首長の家であるように見える。

古事記下巻の穴穗御子すなわち安康天皇の条に、根臣の讒言を真に受けた安康天皇にその父大日下王を殺された七歳の目弱王が、寝ている天皇を殺して都夫良意富美の家に逃げ込んだことが記されている。

(大長谷王子) 亦軍を興して都夫良意富美の家を囲みたまひき。

この時、都夫良意富美は「佩ける兵を解きて、八度拝みて」、詔命を尊重する旨を述べたあと、

往古より今時に至るまで、臣連の王の宮に隠ることは聞けど、未だ王子の臣の家に隠りまししを聞かず。是を以ちて思ふに、賤しき奴意富美は、力を竭して戦ふとも、更に勝つべきこと無けむ。然れども己を待みて、随の家に入り坐しし王子は、死にても棄てじとまをしき。如此白して、亦其の兵を取りて、還りて入りて戦ひき。爾に力窮まり矢尽きぬれば、其の王子に白しけらく、僕は手悉に傷ひぬ。矢も亦尽きぬ。今は得戦はじ。如何かとまをしき。其の王子答へて詔りたまひしく、然らば更に為むすべなし。今は吾を殺せよとのりたまひき。故、刀を以ちて其の王子を刺し殺して、乃ち己が頸を切りて死にき。

とある。

「往古より今時に至るまで、臣連の王の宮に隠ることは聞けど」というのは、王の宮が至高の場であるとともに絶対に安全な不可侵の場所であるからであらう。これに対して「王子の臣の家に隠りまししを聞かず」というように、目弱王はそうした条件を持たない都夫良意富美の家に逃げ込んだ。そして都夫良意富美は「死にても棄てじ」と、命をかけて目弱王を守った。もともと目弱王の父の大日下王は、仁徳天皇の子で安康天皇の叔父であり、両者は「等し族」に属していた。そうした天皇の一族の家、あるいは有力な貴族の家は本来一種の不可侵性をもっており、伝統的なからの家の

不可侵性と大陸の影響の下で展開する天皇の家の観念的に至高の不可侵性とが、ここではぶつかり合っている。都夫良意富美が「佩ける兵を解きて、八度拝みて」、詔命を尊重する旨を述べたのは、天皇の観念的に至高の位置を示しているが、現実には都夫良意富美の家もまた同様の不可侵性をもっていたのである。

現実の軍事的衝突において、家は館としてその防御機能を發揮した。今ひとつの要素は当然のことながら、家の防衛にあたる「軍」であった。古事記中巻の神武東征と結びついた久米歌の物語に、

（兄宇迦斯、弟宇迦斯）待ち撃たむと云ひて軍を聚めき。

とある。これは神武すなわち神倭伊波礼毘古命の征討に対して防衛態勢を取ろうとしたのである。防衛する側は家に軍を集め、攻撃する側は軍を興してその家を攻撃するのであり、軍と家がほぼ当時の軍事的力量のすべてであったように見える。

家はこのような意味において、当時の社会的な力の結集の中心にあった。そして、このような事態に対応して、当時の貴族あるいは王族の家には、一種の宗教的な価値観が結びついていた。

古事記上巻の大国主神の説話に、かれが国譲りしようとした時のことを、

此の葦原中国は、命の随に既に献らむ。唯僕が住所をば、天つ神の御子の天津日繼知らしめす登陀流天の御巢如して、底津石根に宮柱布斗斯理、高天の原に氷木多迦斯理て治め賜はば、僕は百足らず八十垺手に隠りて侍ひなむ。

ここでは、大国主神の住所を譲ることがすなわち国譲りの中核的行為となっている。ここで「底津石根に宮柱布斗斯理、高天の原に氷木多迦斯理」というのは、天皇の家として聖化された家の表現として、古事記、祝詞を通じて頻見する。氷木は「千木高知りて」（祝詞）とも言われ、「鯉魚を上げて」（古事記下巻、志幾の大県主の説話）というのも類似の意義をもった表現であろう。

こうして天皇の家は、天地にその存在を認知された聖なる家として天皇が「天津日繼知らしめす」場となるが、「天津

日繼知らしめす」この行為の具体的な内容は、古事記下巻履中天皇条に水菌別命が曾婆訶理を謀ったことを次のように記すことで伺いうる。

即ち飯宮を造りて、忽かに豊樂為たまひて、乃ち其の隼人に大臣の位を賜ひ、百官をして拝ましめたまふに、隼人歡喜びて、志遂げぬと以為ひき。

これに関連しては、先に引用した兄宇迦斯、弟宇迦斯の説話に、

仕へ奉らむと欺陽りて、大殿を作り、其の殿の内に押機を作りて待ちし時。

とあり、古事記中巻の小碓命すなわち倭建命の熊曾建の殺害に関して、

熊曾建の家に到りて見たまへば、其の家の辺に軍三重に囲み、室を作りて居りき。是に御室樂為むと言ひ動みて、食物を設け備へき。

とある。

「底津石根に宮柱布斗斯理、高天の原に氷木多迦斯理」た聖なる家すなわち宮、殿において、宴会を催してその場で権力の分配あるいは再分配を行なうこと、臣下の側から言えば「仕へ奉る」ことが、政治的行為の中心的要素として存在していたのである。

これを言い換えれば、有牆壁社会としての古代中国が複合的な政治社会として存在していたのに対して、無牆壁社会としての古代日本はいわば「家」の構成原理をそのまま秩序原理とする社会として存在していたといえよう。

四、唐代の都市城郭の規格性について

(一)、首都長安城の規格性

ここで、都市城郭の規格性を問題にするのは、中国以外の地域では規格的な都市城郭の数は少なく、またそうした地

域に規格的な城郭が存在する場合にも、その規格が国家的に統一されているようには見えないからである。すなわち、都市城郭の規格性の問題は世界の初期文明の分布と重なるように見える城郭文明のなかでの中国文明の個性にかかわる問題であるように見受けられるからである。

筆者は序論において、中国古代都市の分布の中心が当時の中原にあることを明らかにした筆者の著書に言及した。さらに筆者は同じ著書の中の別の論考において、このような城郭が当時の方形地割の上のついていたという事実の持つ重要な意義に言及した。中国の古代国家は、この方形地割のなかに天下のあるゆる土地を位置付け、こうして位置付けることによりその土地に対する支配権を設定したのである。

このような政策が秦地を中心に貫徹しだした紀元前四世紀のはじめころから、中国においては「天円地方」の觀念が確立した。方形の天下は、方形の行政区画によつて区分され、この方形の行政区画の中心に方形の城郭都市が存在していたのである（前掲『中国古代の邑制と田制』）。

このような古代中国人の世界認識に対して、古代バビロニア人は「大地は平坦なもので、世界の陸地は円盤のような形をなして、それを取りまく世界の海の上に浮かんでいると考えた」（図二）⁸。砂漠と海という規格性を持たない自然環境のなかにあった中近東の文明に対して、黄土地における農耕という条件のなかから生まれた方形地割という土地の人為的区画が、



図二 バビロニアの古地図（織田武雄『地図の歴史』
I～VIIは彼岸の陸地、I、V、VIIは欠損、Wは湿地、
Bはバビロン、Mは山地、Pはペルシア湾。

古代中国の「天円地方」の観念を生んだのであり、このような「天円地方」の観念成立の背景と関連して中国の都市城郭の規格性が成立したと筆者は想定するのである（前掲書）。

もつぱら、古代中国を対象としてなされた筆者の観察が、巨視的には近世中国すなわち伝統中国の歴史の最後の段階にも当てはまることを示すのが、中村治兵衛氏の研究である。

同氏の天一閣明代方志選刊による統計によれば、「河北、山東、河南の一二〇都市のうち城壁をもたなかったのは」一例、これも万曆には土城を築いている。これに対して、「華中南一八六例中四四・二割余」が城壁をもっていない。さらに城郭都市の城壁の形態についての同氏の統計を引用すると次のようになる（表一）。

なお、ここではやや統計の表示の仕方を変えて、中村氏の統計で方形、長方形とされたものを広義の方形とし、楕円形、甕形、円形、半円形とされたものを広義の円形とし、六角形、八角形、丁字形、十字形、不規則形とされたものを多角形とした。さらに地域ごとの各形態の百分率を付加した。

すなわち、明代において華北の都市城郭の八割以上が広義の方形であるのに対して、華中、長江中下流、華南では、広義の円形の城郭が五割以上を占める。これは巨視的には、中国古代における城郭都市の分布と城郭形態の分布が、そのまま明代にまでつながっていることを示している。

次に、この都市城郭の規格性の問題を唐代の首都と地方都市のそれぞれの場合について簡単に検討する。

表一 明代中国の都市城郭の形態

城郭の形態 地域	広義の方形	広義の円形	多角形	
華北	93 (81・58%)	8 (7・02%)	13 (11・40%)	114 (100%)
華中	21 (33・33%)	37 (58・73%)	5 (7・94%)	63 (100%)
長江中下流	18 (42・86%)	23 (54・76%)	1 (2・38%)	42 (100%)
華南	14 (40・00%)	20 (57・14%)	1 (2・86%)	35 (100%)

唐代長安の城郭の規格性を検討する際には、最低ふたつの問題がある。それは記録に残された城郭の規模からどのような規格性が読み取れるのかという問題と、現在の唐代長安の城郭遺址と記録上のそれとの間の異同の問題である。まず、前者の問題について見れば、新唐書三十七地理志に見られる数値にははっきりとした規格性が読み取れないという問題がある。今、新唐書三十七地理志に書十八地理志に見られる数値にははっきりとした規格性が読み取れないという問題がある。今、新唐書三十七地理志によって長安の宮城、皇城、京城のそれぞれの規模を示すと次のようになる(表二)。

以上のように、唐長安城の規格はとりあえず二四〇歩と三六〇歩の整数倍であるという点に求められよう。これは秦漢の一里が二四〇歩であり、唐代の一里が三六〇歩であった事実を象徴的に表現するものである。もちろん、秦漢と唐代の一步あるいは一里の実際の長さは相当に異なっているのがあるが。

こうして、新唐書の記録からは唐長安城の規模に一定の規格性を見いだすことが可能になるが、ここから実際の唐長安城の規格を決定することはできない。

問題は旧唐書地理志の京城に関する記録には「東西八里百五十歩、南北十五里百七十五歩」とあつて直接には象徴的な意味が読み取れない上に、この数字が新唐書の記録と一致しないことである。さらに、現在考古学における唐長安城の規模に関する見方もまた一致していない。すなわち、史念海氏主編の『西安歴史地図集』(西安地圖出版社一九九六)では、外郭城(京城)は東西約九・七キロ、南北約八・六キロ、周長約三六キロとしている(同書は隋の大興城についてもほぼ同様の規模と推定している)。これに対し

表二 長安の宮城、皇城、京城の規格

宮城	長1440歩 長唐4里(240と360の倍数) 広唐2里240歩(240の倍数) 周唐13里180歩(180の倍数)	広960歩 周4860歩
皇城	長1915歩 長唐5里115歩(長1920歩であれば240の倍数) 広3里120歩(240の倍数)	広1200歩
京城	長6665歩 18唐里185歩 15唐里175歩 周67里(360の倍数) (長広から計算すると周68里→360と240の倍数)	広5575歩 周24120歩

て、日比野丈夫氏は平凡社『アジア歴史事典』において、長安京城は東西約九・七キロ、南北約八・二キロと推定されている。常識的には本国の最近の成果を踏まえた史念海氏の見解を採用するべきであろうが、そう簡単には行かない事情がある。すなわち、前記の旧唐書の数字によれば長安外城の縦横比は、一・一九六、新唐書の数字によれば長安外城の縦横比は、一・一八九とかなり近い数値を取り、これは日比野氏の場合の一・一八三とほぼ一致するが、史念海氏の場合の一・二二八(唐長安城)、一・二二四(隋大興城)と相当に隔たるからである。

以上のような状況からは、唐長安城の実際の具体的な数値上の規格性の追求は現在には不可能であり、ただ文献上に残された規格性の確認に止めるほかにということになる。ただし、実際の規格性についても、中心軸の問題、城郭内のサブ区分としての坊の規格性等、宿白氏やそれを引き継いだ妹尾氏が詳説するところであるし、妹尾氏作成の長安図を一見するだけでも、全体としてのその規格性は明らかであるけれども(妹尾達彦『長安の都市計画』講談社選書二〇〇一)。次に、この旧唐書地理志の記録と日比野氏の主張する唐長安城の縦横比の一致から計算される数値が当時の実際の尺度を反映したものか否かという問題がある。

この数字によって計算すると、旧唐書の東西十八里一百五十歩すなわち東西六六三〇歩という数字と東西九・七キロという実測値の対応からは、一歩一・四六三〇四六メートル、一尺〇・二九二六〇九という数値が、南北十五里百七十五歩すなわち五五七五歩と南北八・二キロという実測値の対応からは、一歩一・四七〇八五二メートル、一尺〇・二九四一七〇という数字が得られる。そこで、この二つの数字の平均をとって、一唐尺を〇・二九三メートルと推定することがひとつの可能性としては成立する。

しかし、宿白氏の研究によれば、新唐書では「長四千三百二十一歩、広三千一百二十二歩」とある北都太原は、実測では長さ約六キロ、広四・三三キロである。これは、長さから計算すると、唐一歩が一・三八八五六七メートル、唐一尺が一・二七七七二三、広さからは唐一歩が一・三八六九三一メートル、唐一尺が一・二七七三八六メートルとなる。この数字の方が、縦横二つの数字がよくあうが、これは実物によって示される一尺二九・〇cmから三一・〇cmという唐代の尺度と

は大きく食い違っている。¹²⁾

以上、ここでは実際行なった計算作業の一部のみを紹介したが、歴史史料の数字と実測の数字を対照し、さらに当時実際に使用された尺度を確定するという作業は非常に困難であることが理解できる。

(2) 唐代地方都市城郭の規格性

次に中国の地方都市の城郭の規格の問題を、主としてすでに引用した宿白氏の論文を重要な手がかりとして論じたい。

宿白論文によれば、唐代の中国には、周長一〇キロが大型州、周長六・五キロが中型州、四・五キロが小型州、二キロが県という規格が存在したとされる。その根拠となるのは、(表三)の諸例である。

この現代の尺度によって表現された城郭規格が唐代のどういう規定と対応していたのかを追求することはきわめて困難である。このような作業をすすめる方策としては、第一に当時の文献からあるいは文献と実測の照応からの確定、第二に現存する唐代の物差しに見られる尺度からの推定という二つの方法が考えられる。しかし、第一の作業が困難なことはすでに見たとおりであり、第二の方策も実際に残された唐代の尺度の遺物が漢代に比してはなだ少数であることと、遺物の尺度相互の間の不一致が漢代に比してよりばらつきが大きいという困難があり、ほとんど追求不可能である。

漢代の場合には、この散らばりが狭い上に残存資料の数もはるかに多いと言う事実からひとつの仮説を立てるとすると、漢代の標準的な尺度は、現実にも基本的にそのまま使われて

長安から北京へ——城郭都市の観点から見た中華二〇〇〇年の首都(佐竹)

表三 唐代地方都市城郭の規格

行政単位の階梯	実例
大型州 (周長10キロ)	潞州城旧址 (今山西長治市旧城) 蒲州城旧跡 (今山西永濟旧城)
中型州 (周長6.5キロ)	雲州城
小型州 (周長4.5キロ)	汾州城、萊州城
県城 (周長2キロ)	婦順州城 (北京順義県旧城)

いたが、唐代の場合には、現実の尺度と標準的な尺度が必ずしも一致しなかったという情況が想定できる。そして、城郭の建設というような国家的に組織された土木工事では、標準的な尺度が使用されたのではないかと推定できる。

そこで第三の方策として、日本と中国の尺度のあいだに強い連鎖あるいは一種の対応があると仮定して、日本に伝わる尺度のなかに、唐代の標準的な尺度が残されているという仮説を立てたい。そのような尺度として想定できる第一の尺度は、いわゆる鯨尺である。いま、鯨尺を使用してこの宿白氏の想定する城郭都市の基準を唐代のそれに読み替えるとその計算は次のようになる(表四)。

これははなはだ投機的なやり方であるが、この計算の結果は実に見事な数字になる。

しかもこの鯨尺の一メートルが約三〇・三cmという数字は、前掲のように一尺二九・〇cmから三一・〇cmの間に分布する唐尺の遺物(全体で十一例)に見える尺度のほぼ中央値であると言つてよい。さらにここで注目されるのは、端数として出てくる歩数がいずれも三十歩を単位としていることである。実は、秦漢期の中国では、都市においても農村においても、土木工事の単位は三十歩であつた。¹³⁾ 実際には、秦漢期の三十歩と唐代のそれは長さとしては異なっているのであるが、三十歩を計算の単位とするという技法は共通している。

このような状況からは、唐代の城郭築造の際の基本的尺度はわが国の鯨尺であつたとする結論が引き出せよう。

いまひとつ、このような計算でその規格を推定できる例として、これも宿白氏が問題にされている大同旧城の例がある。大同旧城は開元二十年(七三二)重建といわれており、東西一・五キロ、南北一・七五キロであるが、これは、以下のような計算になる(表五)。

表四 鯨尺による唐代の城郭都市の規格の推定(一尺0.303030303メートル)

城郭都市の規模	唐里による表示	唐里と唐歩による表示
大型州(周長10キロ)	18.33333 唐里	18 唐里+120.00006 唐歩
中型州(周長6.5キロ)	11.91666 唐里	11 唐里+330.00004 唐歩
小型州(周長4.5キロ)	8.25000 唐里	8 唐里+ 90.00000 唐歩
県(周長2キロ)	3.66667 唐里	3 唐里+240.00000 唐歩

これとやや異なるのは東西一一六五m、南北一〇三九mの内蒙古榆林城址である。この場合には唐制による計算の結果は有意な数値を取らないが、周制で計算すると有意な数値を取る（表六）。周制の尺度と秦制の尺度との間には簡単な比例関係があり、榆林は秦始皇帝が巡幸した地点であり、榆林城址の規格が秦時のそれを伝えていると考えれば、納得できる数値ではある。

いずれにしても、以上によつて唐代の都市城郭には明瞭な統一的基本準があり、この基準は城郭の周囲の長さをめぐつて設定されているように見える。おそらくこれは、城郭建設の労働量の基準が、城郭の周囲の長さと同様であるからであろう。

五、江戸と江戸城Ⅱ

日本における牆壁文明の吸収と館郭文明の伝統

日本社会は、すでに検討したような無牆壁文明をその基本的特性として保持しながらも、圧倒的な中国の牆壁文明を受容することによつて、国家段階の社会への変貌を遂げた。今、当時の日本社会の牆壁文明の受容を、第一に支配の形式的斉一性、第二に総体的統制性、支配の超越性の二点において認識しようとするれば、それらはすくなくとも、律令体制、条里制度と地籍、戸籍、王都と王城の形式的斉一性といった諸点から成り立っていたと概括することができよう¹⁴。

こうした諸要素のなかで、現象的にわれわれがもつとも簡単に観察できるのは、王都と王城の形式的斉一性であろう。平城京と平安京の整然たる条坊制度、その巨大

長安から北京へ——城郭都市の観点から見た中華二〇〇〇年の首都（佐竹）

表五 唐代大同城郭の規格の復元（一尺0.3030303メートル）

城郭の一辺	唐里による表示	唐里と唐歩による表示
東西1・5キロ	2.7500000 唐里	2 唐里+270.00000 唐歩
南北1・75キロ	3.2083334 唐里	3 唐里+75.000024 唐歩

表六 周制による内蒙古榆林城址規格の復元（一尺0.18メートル一歩六尺）

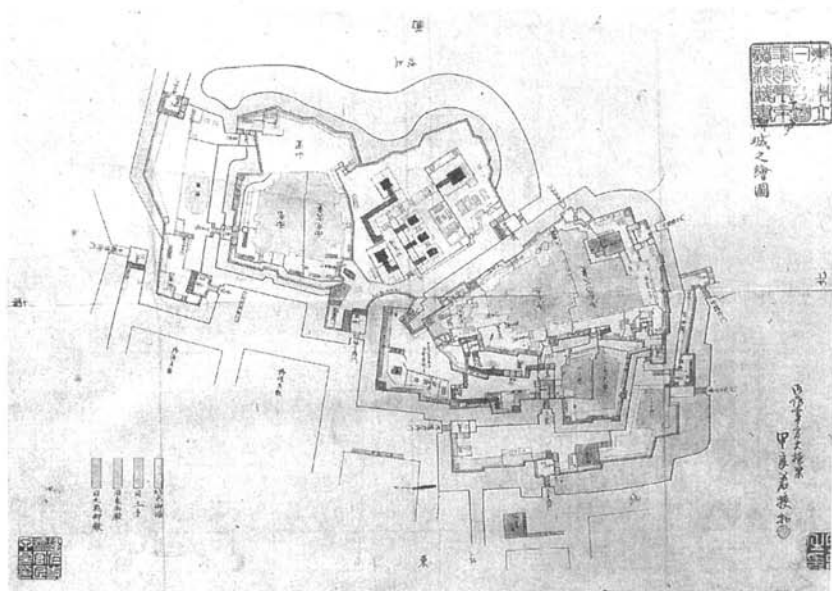
城郭の一辺	周里・周歩	修正数値	周里・周歩
東西1165m	3周里+178.70370周歩	東西1166.4m	3周里+180周歩
南北1039m	3周里+62.03704周歩	南北1036.8m	3周里+60周歩

な条坊の広がりのおかげで、隋唐の長安京と同様に全体の北部中央に造営されたこれまた整然たる地割りと建造物をもつ大内裏を見ればそれは一目瞭然である。たとえ、これらの日本の王都にあつて、中国のような物理的防衛への貢献を目的とした牆壁の要素が著しく希薄であつたとしても、それらは王都と王城の形式的斉一性という点では中国のそれに瓜二つといつてよいほどに忠実に受容されている。

以上のような無牆壁文明日本の中国の牆壁文明の千年を越える受容の歴史の結果を示すひとつの姿が、江戸と江戸城に表現されている。

次に示すのは「江戸御城之絵図」(東京都立中央図書館東京誌料所蔵)・深井雅海『図解江戸城を読む』(原書房一九九七)より引用・図三」と「天保十四年御江戸大絵図」(人文社『復刻古地図』・図四)である。人文社の絵図は、たとえば深井氏が採用された東京都立中央図書館や東京国立博物館に所蔵される絵図に比して、やや信頼性が落ちると思われるが、一般的な入手の便を考えてあえてこちらをも参照した。

この二つの絵図を見て、ただちに気が付くのは牆壁



図三 江戸御城之絵図(東京都立中央図書館東京誌料所蔵
深井雅海『図解江戸城を読む』より引用)

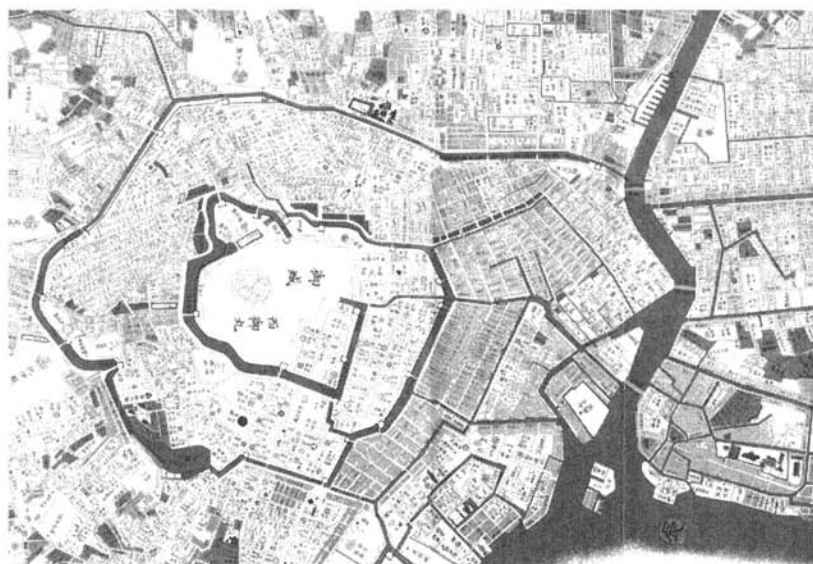
文明社会中国の特徴であり、かつすくなくとも形態的にはかつて古代日本において全面的に取り入れられた王都と王宮の形式的斉一性がまったくその姿を消しているという簡単な事実である。

基本的には平面の上に、建物、城郭、都市地割りのすべてが方形に設計されている中国の場合、あるいはそれを全面的に受け入れた平城京、平安京の場合とは異なり、江戸と江戸城にあつては、高低のある地形がとくに江戸城の場合にはその設計の基本において考慮されており、都市江戸の場合においても微地形と水流によつて規定される不定形な要因がその設計、もしそういうものがある⁽¹⁵⁾とすると、の基本的要素となっている。

形式的斉一性という要素に絞つて江戸を見た場合には、地割りにある程度の整形性がみられるのは町人居住区に限られ、その他の部分では大小不等の武家屋敷や寺社の地割りに制約されて、中国の場合のような町割りの全体としての整形性は保障されていない。

同様に江戸城の場合には、大奥のなかの長局の部屋割り以外に形式的斉一性が保たれている場所はない（深井前掲書参照）。端的に言えば、江戸と江戸城のいずれの場

長安から北京へ——城郭都市の観点から見た中華二〇〇〇年の首都（佐竹）



図四 天保十四年御江戸大絵図（人文社）

合にも、明確な権力の統制の対象のみが一定程度の形式的斉一性の原則によって統制されているのであり、権力構成の内部においては、形式的斉一性は貫かれてはいない。

中国においては、皇帝の住居である宮城、皇帝の男系親族とその家族の住居である皇城、百官と首都住民の居住する京城は、入れ子のように積み重ねられた方形の世界である。そこでは無限の権力を持った皇帝とその住居たる宮城から、順次権力の低下する同心円的構造が見られる。ここでの牆壁は、高処にあるその内部とより低位にあるその外部を隔てるべき役割を果たすものである。宮城にいる皇帝はその外のいかなる場にも出入り自由、皇城にいる皇族はその外のいかなる場にも出入り自由、京城内の住民はその城門を自由に出入りするが、逆に、京城外の人間、皇城外の人間、宮城外の人間が、内に向けて城門をくぐるときには厳重なチェックがかけられる。これに対して江戸城においては、本丸、二の丸、西の丸がそれぞれ一定の自立性をもって、將軍といえども世子や御台所のいる二の丸、西の丸への出入りには一定の手続きが必要であったと言われているようであり、状況は大きく異なっているように見える。¹⁶⁾

端的に言えば、江戸城の中心には、たとえば本丸の將軍の家、二の丸の御台所の家、西の丸の世子の家が一定の自立性をもった親族関係のような形で存在していたのである。一旦古代日本において吸収された皇帝を中心とする同心円的官僚統制の原理は、日本古代国家の形成に大きな役割を果たし、その後その形式を変えながらも内容的には日本の国家的関係の中核として生き続けたにもかかわらず、形式的にはついに日本に根付かなかったと言えよう。そこに見られたのは古代日本の館を中心としてそのまわりに家族的私的な原理によって兵力を集集するという日本型原理の、外来的要素の消化吸収による変貌を通じたいつその成熟であった。

結語

以上、人類の初期文明における普遍的な有牆壁社会の存在を手がかりとして、牆壁をもつ社会としての中国と牆壁を

もたない社会としての日本を比較対照しながら、この面から中国社会の特性と日本社会の特性を明らかにするための努力を行なった。牆壁の形態の比較というもつとも基底的で単純な現象の分析に限って、中国と日本の公權力がどのような形をとってその支配を構成するのかを検討したのである。

もつとも簡単に結論を述べれば、中国においては古代以来明代に到るまで（実際には清末に到るまで）、一貫して明瞭な規格性をもった公的な牆壁によつて住民を区分することを通じて支配を行ってきた。これに対して日本においてはこのような形の文明の吸収によつて、国家の公的支配の原型が形づくられたが、それはさまざまな換骨奪胎を通じて、日本型文明の一貫した特徴としての私的な館郭による組織を通じた家の原理による支配を支えるように変化したということになる。

日本の古代国家の早熟的な形成とその形成過程において大陸文明の吸収消化が決定的な役割を演じたことは、周知の事実である。本稿では唐代の都市城郭の規格を決定する標準尺が日本に伝わる鯨尺であると推定した。これは、逆に言えば唐代の文明を吸収した日本において、この時の中国の標準の尺度が千年の日時を経てなおその生命力を保っていたことを意味している。

筆者の理解するところによれば、日本の古代国家の早熟的な形成を保障した要素は、第一に書き言葉の導入、第二に数理的規格性の導入である。書き言葉によつてまずは空間を越え、つづいて時間を越えた人間の行為の客観的認識とそのことを通じた客観的規制が可能になった。ついで数理的規格性の導入によつて、同様に時空を越えた量的認識と量的規制が可能になった。社会全体を対象として規定する律令制度が書き言葉の獲得を基礎にしていたことは言うまでもない。後者について言えば、筆者の見解によれば古代日本国家が早熟的に大地に対する支配、規制の権力を手することができたもつとも重要な要素は、条里制度の導入によつて、天が下のあるゆる土地を天皇すなわち「すめらみこと」の「知らしめる」対象として確定できたことによる。¹⁷

律令制度と条里制度を日本の古代国家の二つの根幹的要素と考えるとき、条里制度を背景にもつ日本古代の地籍の制

度の「大田文」としての武家への継承、律令制度として成立した法体系への「御成敗式目」をはじめとする武家法の初歩的介入といった日本史の様相を長期的な観点から観察すれば、日本の大陸文明の吸収とその換骨奪胎の形で定着は、織豊政権の成立によってその最終的段階を迎えたと言つてよいと思われる。この意味に限つて言えば、日本の古代の終焉を織豊政権の成立に見る安良城盛昭氏の見解は、なお客観的な認識として承認すべきである。そして織豊政権を引き継いだ徳川幕府による江戸と江戸城の造営には、内容的な大陸文明の吸収とその血肉化とともに、形式的には相変わらずはるか古事記の時代にさかのぼる日本の要素の継続・再生が見られたのである。

本稿は人類史の高処からの視察に始まり、中国都市城郭の規格性、日本古代の館や江戸城の支配原理の局部的考察に及んだ。さまざまな階梯の論理と事実を、短い篇幅に詰め込んで論じたために、さまざまな空隙を含んだ議論となっているが、この点を受け入れた上での読者諸氏の批判と教示に期待している。

(1) 宮崎市定「中国における聚落形体の変遷について―邑・国と郷・亭と村とに対する考察」『大谷史学』六 一九五七、佐竹靖彦「続漢書郡国志古地名集録」『東京都立大学「人文学報」三〇六』二〇〇〇。

(2) 妹尾達彦「長安の都市計画」(講談社選書メチエ、二〇〇一)。なおここでは「農業―遊牧境域線」という表現がなされていたが、最近では、「農業―遊牧境界地帯」と表現が改められている。「二千年十二月二十八日・唐宋変遷プロジェクト第二回研究会」(二千年三月六日・国際シンポジウム「東アジアの都市史と環境史―新しい世界へ」)。

(3) 「ユーラシア大陸の文明地図」(『文明の生態史観序説』「中央公論」一九五七年二月号。安田喜憲「大地母神の時代」一九九一角川選書より引用)。

(4) イギリス産業資本の発展に対する大陸との関係の重要性については、ジョオン・サースク著三好洋子訳「消費社会の誕生―近世イギリスの新企業」(一九八四東京大学出版会)がきわめて興味ある事実を示している。また、この梅棹氏の理論と同時ころに提唱されていた大塚久雄氏の文明の中心の遷徙に関する学説にも注意する必要がある。大塚久雄氏の場合の「文明の中心の遷徙」は梅棹氏の場合とは現象的には逆に、文明の自然な成長のためにはその中心の遷徙すなわち移動が必要であると考えるのであるが、「文明の自然な成長」という発想においては梅棹氏の見解とのあいだに共通点がある(大塚久雄氏「われわれは封建

制から資本主義への移行過程をどのように問題とするのか」岩波書店『西洋経済史講座Ⅰ—封建制の経済的基礎』一九六〇。
大塚久雄氏の場合には、文明の自然な発展が、過去の伝統のしがらみで阻害されるので、文明の中心が遷徙するとされる。これに対して梅棹忠夫の場合は、遊牧社会からの攻撃と破壊が文明の自然な発展すなわち遷移を阻害し、そのような悪条件から免れた地域において、文明の自然な発展すなわち典型的な遷移が見られるとされる。いずれの場合にも、文明の自然な発展とその阻害要因との関係が問題となっている。この大塚理論の貢献と問題点については、拙著『唐宋変革の地域的研究』序論一九九〇参照。

(5) 白川静『詩経国風』『詩経雅頌1』『詩経雅頌2』(平凡社東洋文庫、一九九八)。武田祐吉『古事記』(角川書店、一九五六)、倉野憲司・武田祐吉『古事記 祝詞』(岩波書店、一九五八)。

(6) 詩経邶風『擊鼓』擊鼓其鏜、踊躍用兵、土国城漕、我独南行。鄭風『子衿』挑兮達兮、在城闕兮、一日不見、如三月兮。鄭風『將仲子兮』將仲子兮、無踰我里……將仲子兮、無踰我牆。なお、陳風『東門之粉』東門之粉、東門之池、東門之楊』がある。

(7) 詩経小雅谷風『大東』周道如砥、其直如矢、君子所履、小人所視。

(8) 織田武雄『地図の歴史』講談社(一九七三)。このバビロニアの古代地図についての件については石見清裕早稲田大学助教授のご教示にあずかった。厚くお礼申し上げる。

(9) 唐代史研究会『中国都市の歴史的研究』一九八八の中村治兵衛氏による総論参照。

(10) 中国の城郭都市の問題については、ここで挙げた『中国都市の歴史的研究』所収の諸論文、前掲拙著や五井直弘『中国古代の城郭都市と地域支配』名著刊行会二〇〇二のほか、曲英傑『古代都市』文物出版社二〇〇三がある。曲著は華北の諸都市を中心として宋遼金元期までを扱っている。

(11) 唐代の副都の洛陽、太原、揚州、成都についても新旧唐書を中心に史料が残されており、それぞれいくつかの研究があるが、ここでは割愛する。

(12) 宿白『隋唐城址類型初探(提綱)』『記念北京大学考古專業三十周年論文集一九五二—一九八二』北京大学考古系編、文物出版社一九九〇。国家計量総局主編『中国古代度量衡図集』文物出版社一九八一。

(13) 佐竹靖彦『阜陽漢簡』里八則為田十則。考。前掲『中国都市の歴史的研究』ならびに前掲拙著参照。

(14) 中国古代国家の支配のこうした特性については前掲拙著参照。
(15) ただし、中国の宮城において高低差がそれなりに重要な要素であったことは、また別に論じるべき問題である。この意味においては、日本の平城京や平安京で内裏の設計に高低差が無視されたように見えることの意味もまた検討すべき問題である。

(16) 江戸城の状況については、福田千鶴首都大学東京助教授の教示による。

(17) 印刷中の前掲拙著参照。

(18) 安良城盛昭『幕藩制社会の成立と構造』(お茶の水書房一九五九)。

【付記】

本稿は最初、メトロポリタン史学会の創立大会で発表したものであるが、その時点では新羅の都城たる慶州の都市計画についても言及した。今回は紙幅の制限のためにこの部分を割愛した。あらためて専論として発表したいと考えている。

慶州の都城の都市計画については現在、尹武炳氏の復元と田中俊明・東潮両氏の復元とが有力であるが(田中俊明・東潮編著『韓国の古代遺跡―新羅編(慶州)』、中央公論社一九八八)、筆者は基本的に田中俊明・東潮両氏の復元によるべきであると考え(補1)。

その理由はすでに両氏が指摘するように月城を完全に坊里制のなかに取り込む尹氏の復元に疑問をもつからであるし、雁鴨池(東宮)もまた坊里制に入らない区画をもった可能性が強い。さらに全体を三十六里、うち一坊のみを王宮にあてる復元案にも疑問がある。

筆者自身は邑城が慶州全体の都市計画の一部として重要な区画をなしていたのではないかと推測している。田中・東両氏にしたがって、邑城を都市計画の西北隅に存在したと想定できるなら、それは中国の都督府の制度であった可能性が高いからである(前掲宿白『隋唐城址類型初探』参照)。

韓国、日本等の東亜の古代国家で中国の制度と自国の制度との二重体制が取られたことは宮崎市定氏がつとに指摘されたことである(宮崎市定『三韓時代の位階制について』『朝鮮学報』十四、一九五九および『日本の官位令と唐の官品令』『東方学』十八、一九五九)。新羅の都城慶州の都市計画は、本来の王宮としての月城と中国向けの形式的執務府たる邑城

の二重体制から、東宮、北宮の中国風王宮の造営への変化として捉えられるのではないだろうか。

(補1) 大会当日の木下正史氏の発表や木邑誠氏の「朝鮮古代の山城と都市をたずねて」(都立大学談話会会報二〇〇四)も、田中・東両氏の復元を標準的なものとしている。